

someone (サムワン)

誰か。

あるいは大事な人。

皆がサムをおてんばと呼ぶ。トムボーイとサムを掛けた語呂合わせの愛称だ。

落ち着きがないと父は嘆き、困ったものねと母は苦笑する。

仕方ない、じつとしてるのは苦手だ。

探検がサムの生き甲斐なのだ。

今日も今日とて朝飯前の腹ごなしにだだっ広いトウモロコシ畑を走っていたら、目印の案山子男の所にきた。サムとおそろいの麻袋を被つてる。

「おはよ、ジョニー」

麻袋で覆面をした案山子に元氣よく挨拶し、背後に回り込んで地面を掘り返す。ここに宝物を埋めてあるのだ。

土の中から出てきたクツキー缶には妖精のポストカードやスリングショットをはじめとするがらくたの数々が詰められている。カラフルなビー玉に銀玉、カートウーンの指人形……一個一個取り出して並べていく。

一番底に畳まれた布はサムが赤ん坊の時に使っていた涎かけだ。

サム本人は覚えてないが、母曰く大のお気に入りだったとの事で宝物リストの末尾に加えることにした。端っこにはデイジーの刺繍があしらわれている。

無意識に郷愁を感じてデイジーの刺繍をなでる。裁縫下手な母が施したにしては出来がいい。

死角でガサリと音が立った。

「ああ……うー」

畑の反対側から出てきたのは愚鈍そうな大男。

逆光になった目がぎよろりと動き、驚愕に固まるサムを見下ろす。

「あなたは誰？」

「うー」

「収穫の手伝いに来てくれたの？ 仕事の時間にはまだ早いけど、下見したら迷子になっちゃったとか」

「あー」

この人、口がきけないんだ。

もどかしそうに呻く男に同情が湧き上がり、子供特有の銜いない好奇心で話しかける。

「僕はサム、このトウモロコシ畑は父さんのものなんだ。

あの家に住んでるんの、見える？」

精一杯爪先立って指させば、男がのろくさく振り向いて目を眇める。

トウモロコシ畑の遥か彼方、木製の白い白い家。庭の木には父が作ったブランコがある。

「父さんは写真を撮るのが好きなんだ。この前ブランコで撮ってもらった」

「ごはんよーサムー」

伸び上がって振り仰ぐ。遠く離れたバルコニーに母が立っていた。

「母さんが呼んでる、行かないや。じゃあね」

宝物を埋め直し、去りかけたサムを引き止める。なんだろうと向き直れば男が棒でスペルを綴っていた。

「ジョニーっていの？」

「あー」

男が頷く。はにかむような笑顔にサムまで嬉しくなって、オーバーオールに擦り付けた片手を突き出す。

「よろしくジョニー。またね」

男もサムをまね、オーバーオールで拭いた手で握手を交わす。

「まだなのサム、パンケーキ冷めちゃうわよ」

「うるさいなあ、今行くってば」

家に帰ると朝食が始まっていた。父は指定席で新聞を広げている。

「おはようサム、まだそれ被ってるのか」

「おはよう父さん」

「あなたからも言っちゃって、この子絶対とらないのよ。臭くて汚い麻袋のどこがそんなにいいの、理解に苦しむわね」

「まあまあ、俺たちだつて子供の頃は妙なものが好きだったじゃないか。トンボや蝶の翅、昆虫の脚をコレクションしてただろ？」

「ご飯時にやめてよ、食欲失せるでしょ」

椅子によじのぼったサムは、パンケーキに直接フォークを刺して口に運ぶ。お行儀が悪いと母が顔をしかめる。

続いてスクランブルエッグをかきまぜながら、さつき畑で会った男の話をする。

「案山子のジョニーとおんなじ名前なんだ、すつごい大きいんだよ。トウモロコシよりでっかい」

「出稼ぎの人ね」

「親切にしてやるんだぞ」

「うん、僕たち友達になったんだ」

ジョニーの口が不自由だと知ると両親は同情した。父と母はいい人たちだ。父は新聞を畳んで遠い目をする。

「子供の頃にできた友達は一生物のだからな。大切にしろ」

「友達っていうには離れすぎてないかしら」

「友情に年の差は関係ない、大人と子供でも親友になれるさ。だろ？」

父が悪戯っぽく目を回してほくそえむ。サムはにっこり笑った。

家が孤立してるせいかサムを学校に通わせてもらってない。

一人っ子に友達ができるのは願ってもないはずだ。

ごちそうさまを言った後、たいらげたお皿をシンクに浸ける。

その後は母にお願いされ、レモネードを入れたピッチャーを畑に持っていく。

「麻袋は脱ぎなさいよ！」

「わかったよ！」

父が営む農園はとても広い。収穫期ともなれば州の内外から大勢の労働者がやってくる。

「レモネードいりませんか」

「おお、天の恵みだ！ 有難くいただくよ」

「ありがとな坊主」

トウモロコシを刈り入れて休憩中の労働者は、ピッチャーを持って回るサムを日に焼けて歓迎する。母の特製レモネー

ドは乾いた体に染み渡る。

木陰でだべる労働者たちは皆気さくにサムに話しかけてくる。うちの手伝いをして偉いなど褒めてくれ、自分にもサム位の子供がいるのだと写真を見せてくれる。サムはこの人たちが大好きだった。

「頑張ってるなおてんばサム」

「こんにちはロビン爺、レモネード一杯いかが？」

「すまないね」

よぼよぼの老人にレモネードを注いで渡す。

ロビン爺さんは労働者たちの中でも古株で、毎夏収穫期には必ず訪れて何か月か働いていく。優しく物知りでも面白いから、サムはよく懐いていた。

「そういうサムや、新入りと仲良くなつたみたいだね」

「新入り？」

「だんまりサイレンスジョニーだよ」

皺ばんだ手が指す方を見れば、ジョニーが木の枝で地面を突付けていた。

「朝に話したつたろ」

「見てたんだ。僕たち友達になつたんだよ」

「なるほど……ジョニーは優しい男だよ。過去に不幸があつてからすっかり人が変わってしまったが、仲良くしてやつてくれ」

「不幸つて？」

サムはきよとんとする。ロビン爺は気ますげに目を伏せた。

「すまん、忘れてくれ。ワシの口からはおぞましくとて
も言えんよ」